学内活動報告
順天堂大学保健看護学部　順天堂保健看護研究４
P.49－53（2016）

自治体との共催による認知症サポーター養成講座 キャラバン・メイト養成研修の試み

An attempted to train dementia Supporters Caravan-mate in University

阿　部　詠　子*　黒　川　佳　子*　佐　野　知　世*　仁　科　聖　子*
ABE Eiko　KUROKAWA Yoshiko　SANO Tomoyo　NISHINA Seiko

要　旨

2015 年８月３日、順天堂大学三島キャンパスにおいて、「キャラバン・メイト養成研修」が開催され、およそ 100 名が参加した。これは、認知症サポーター養成講座の講師役となる「キャラバン・メイト」を養成することを目的として、三島駅に近く収容人数も多い順天堂大学保健看護学部で行われた。本学と三島市のキャラバンメイト養成講座は県内自治体で初めての試みであったが参加希望者は定員を超え、研修の満足度も高かった。今後の継続研修内容では認知症の医学知識やケアの方法などの要望が多く、講座の改善や工夫とともに応えて行きたいと考えている。

索 引 用 語：認知症サポーター養成講座、キャラバン・メイト養成研修
Key words：Caravan-mate, dementia Supporters, University

Ⅰ．はじめに

平成22年の「認知症高齢者の日常生活自立度」Ⅱ（日常生活に支障を来すような症状・行動や意志疎通の困難さが多少見られても、誰かが注意すれば自立できる状態）以上の高齢者数は 280 万人で、要介護認定高齢者の 9.5% だった[1)]。今年、2015 年の認知症高齢者の予測数は 345 万人（10.2%）、東京オリンピックの 2020 年には 410 万人（11.3%）、いわゆる団塊の世代が全員 75 歳以上の後期高齢者になる 2025 年には 470 万人（12.8%）と現在の 1.4 倍に増える見込みである[1)]。

少子高齢化の中で、国はそのような認知症高齢者の急増に備える「支え手」として平成 21 年から「認知症サポーター等養成事業」[2)]実施している。認知症サポーター等養成事業は認知症に関する正しい知識を持ち、地域や職域において認知症の人や家族を支援する認知症サポーター等を養成することにより、認知症の人や家族が安心して暮らし続けることのできる地域づくりを推進することを目的としており[3)]、実施主体は都道府県、指定都市、市区町村か、全国的組織を持つ職域団体及び企業である。認知症サポーター等養成事業には認知症対策等総合支援事業の「認知症対策普及・相談・支援事業」と地域支援事業の任意事業を活用できることになっていて実施予算の裏付けとなっている[4)]。

本学部の所在地である静岡県三島市は平成 26 年の人口が 11 万 4,000 万人あまり、高齢化率 25.8％と人口の４人に１人が高齢者になった[5)]。　静岡県では、2015 年までに「認知症サポーター」を 12 万人養成

＊ 順天堂大学保健看護学部
＊ *Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing*
（Nov. 13, 2015　**原稿受付**）（Jan. 22, 2016　**原稿受領**）

することを目標としており、三島市でも養成の結果、平成 26 年 2 月までに 5,057 人の「認知症サポーター」が誕生している[5)]。しかし、約 2,000 人いると報告されている「認知症高齢者の日常生活自立度判定基準」Ⅱ以上の高齢者を支えるには十分とは言い難い状況である。

Ⅱ．キャラバン・メイト養成研修のきっかけ

本学部は 1 学年定員 120 名の平成 22 年 4 月に開校した新しい学部で、現在 2 期生まで卒業している。高齢者に関する学習は大学 1 年次の高齢者看護概論、2 年次の高齢者保健活動論、高齢者看護方法論Ⅰ、高齢者看護実習Ⅰ、3 年次の高齢者看護方法論Ⅱと 3 年次から 4 年次にかけての高齢者看護実習Ⅱで行われている。高齢者看護領域の 4 人の教員でその全ての科目に関わっているが、講義、実習どちらについても学生の反応は今一つ芳しくない。教員の自分の力量もあるが、個々の学生に聞いたり、講義の感想を書くリアクションペーパーの内容でわかったことは、土地柄として 3 世代、4 世代同居家庭出身者が多いにも関わらず、高齢者に筆者が思ったほど関心を示さないということである。特に高齢者看護の講義が行われる 2 年次の初めには、「自分の祖父母が認知症になってしまうかと思うととても悲しいが向き合っていきたい」「認知症になっても自分の家で家族に囲まれて好きなことをできることは幸せと思う」といった意見がある一方、「高齢者は弱くて（虚弱で）動けない」「基礎実習でほとんどしゃべってもらえなかった」「いつも寝ている弱者」「認知症で言っていることがわからない」といったマイナスイメージが強い感想もある。全体的にではあるが、普段、高齢者にふれあう機会が少ない学生では、高齢者への関心が薄く、コミュニケーションも苦手と感じる傾向が強いように感じられた。その傾向は同居していたとしても同様で、コミュニケーションが少ない祖父母の生活状況を「ほとんど知らない」と答えた学生もいた。このような傾向は 2 年次前期の実習において公共施設の元気な高齢者の活動に加わって交流することでイメージが変わり、高齢者への関心も出てくるのだが、もっと早い時期に触れ合う機会が少なく、特にマイナスイメージになりがちな認知症高齢者に関心を持つような工夫はできないだろうかと考えた。

Ⅲ．キャラバン・メイト養成研修の開催過程

1．開催準備

厚生労働省が 2004 年から立ち上げた「認知症サポーター養成講座」があったことを思い出し調べたところ、最近では養成講座が小学校や中学校でも実施されるようになっていた。サポーター養成講座終了時に付与される「オレンジリング」はサポーターの証であり、学生たちの連帯感や責任感が芽生えるきっかけに格好の機会になると思われた。しかし、認知症サポーター養成講座は講座の講師資格である「キャラバン・メイト」の資格がなければ開催はできない。三島市の長寿介護課に問い合わせたところ、キャラバン・メイト研修は年 1 回だけ県内で開催されているが、毎年定員以上に受講希望者が多く、場所も必ずしも交通の便が良い所とは限らない。いつ受講できるのかわからないということだった。「それならば、三島駅に近く、広い講義室がある大学で開催し、自らも受講してはどうか」ということになった。三島市から県の担当者に打診してもらったところ、三島市との共催ならば可能との回答を得て、共催する運びとなった。自治体と大学との共催は、静岡県東部地域で初めての試みとなった。自分は本学に赴任して 2 か月余りの頃であったが、岡田隆夫学部長はまだ顔と名前になじみがない者の提案を快く承認して下さった。三島市の長寿介護課の担当者である大石佳央保健師も移動して来たばかりだったが、快く協力していただき、問い合わせや講師の交渉、申し込み受付もして下さることになった。開催日時はキャンパスの授業関係から 8 月 3 日の 10 時

から12時と決まった。それから臨床実習の合間を縫って５・６回打ち合わせを行った。しかし、サポーター養成講座とは異なって準備はわからないことばかりで、最初の作業は各方面に開催条件や申請方法の問い合わせを行うところから始まった。この作業の大半は自治体窓口である大石佳央保健師がして下さった。

キャラバン・メイトはサポーター養成講座の講師にあたるため、受講資格もある程度医療・介護・福祉、認知症相談ボランティアなどの専門職に限定され、講義の講師も専門職（ほぼ医師）が必要である（**表 1**）。また、キャラバン・メイト養成研修の内容も、認知症の基礎知識と、どうやってサポーター講座を開催するかグループワークで学ぶことを一定の基準に則って実施しなくてはならない。規定のプログラムは休み時間もほとんどなく６時間もかかるものだった（**表２**）。開催は自治体が運営の中心となって行い、50 人以上の参加者と研修終了後は所属する自治体に登録しなければキャラバン・メイトと認定されないなど、細々とした制約があった。最も心配だったのは受講者が少ないと、開催が認められないことだった。受講資格を満たすような専門職が 50 人以上も集まるだろうか。準備期間中、ずっと気にかかっていた。しかし、そのような心配は申込が始まると一気に解消され、三島市内だけでなく、函南町、伊豆の国市、沼津市、裾野市といった近隣市から申込みがあり、当初の定員 60 名のところを最終的に 100 人で打ち切った。

表１ キャラバン・メイト受講対象者

次の要件を満たす者で、年間 10 回程度を目安に（最低実施数３回）、「認知症サポーター養成講座」を原則としてボランティアの立場で行える者。

１．認知症介護指導者養成研修修了者
２．認知症介護実践リーダー研修（認知症介護実務者研修専門課程）修了者
３．介護相談員
４．認知症の人を対象とする家族の会
５．上記に準ずると自治体等が認めた者
　５－１　行政職員（保健師、一般職等）
　５－２　地域包括支援センター職員
　５－３　介護従事者（ケアマネジャー、施設職員、在宅介護支援センター職員等）
　５－４　医療従事者（医師、看護師等）
　５－５　民生児童委員
　５－６　その他（ボランティア等）

※キャラバン・メイト養成研修開催要項より

２．開催当日

この講座の開催は三島市長の耳に入り、当日は報道陣と共に豊岡武士三島市長が来場し、岡田学部長と開講の挨拶を行うことになった。大学は夏季休暇中だったが、事務局の配慮で受講生のために臨時で食堂を開け、有料で弁当を提供することになった。そのような準備を経て当日となった。連日 38℃となる酷暑が続いていたが、開始１時間以上前から受講生が集まってきた。キャラバンメイト養成研修は豊岡市長と岡田学部長の挨拶から始まった。

認知症についての講義は、地元で「認知症の先生」と慕われている広小路クリニックの木野紀（おさむ）先生が行い、グループワークは普段、地域包括支援センターで相談員を務めているキャラバン・メイトの湯山藤枝さんと細谷孝一さんが、大石保健師と共に講師を務めた。受講生は３人がけの机でギッシリと座り、冷房もままならない中、熱気が充満した教室で講義が始まった。木野先生の経験を踏まえた認知症の深い知見のご講義に受講生はみな学生に戻ったように聞き入っていた。予想外だったのは午後のグループワークで、規定時間通りに進行するのが大変だった。

グループワークは認知症の人を地域で支えるために、どの機関に連携したらよいか地域の資源を考えたり、その資源から地域ケアシステムを組むことを 30 分で行ったり、サポーター養成講座の規格・運営ポイントとしてキャラバン・メイトの講師の実体験を踏まえた講義を含め、150 分で公民館やスーパーマーケットなどの講座の開催先を考え、カリキュラムを作って発表しなければならない（**表２**）。講師も受講生も比較的このような研修に慣れた人たちだったが、次第にグループ内での討論に熱が入り、「もっと認知症の施策を充実させるべきだ！」と気勢が挙がり、時間内に収まらなくなってくる。急いで仕上げて発表したり、討論したり、参加者は皆生き生きと学んでいた。最後に、修了証とオレンジリングが授与され、所属自治体別に

表2 キャラバン・メイト養成研修カリキュラム

内　容	時　間
Ⅰ．オリエンテーション 1 研修主催自治体のキャラバン事業の取り組みについて 2 キャンペーンビデオ 3 認知症サポーター100 万人キャラバンとは 4 研修のねらい	30 分
Ⅱ．認知症サポーターに伝えたいこと ・認知症を理解する ・認知症とはどういうものか ・認知症の症状	
・中核症状 ・周辺症状とその支援 ・認知症の診断・治療 ・認知症の予防についての考え方 ・認知症の人と接するときの心がまえ ・認知症介護をしている人の気持ちを理解する	120 分
Ⅲ．認知症サポーター養成講座の運営方法 1．認知症の人を地域で支える ・グループワーク① こんなとき、どこにつなげたらいいか考えてみよう ・地域ケアシステムで支える ・SOS 便利帳をつくろう ・地域包括支援センター、地域の社会資源をおさえる	30 分
2．キャラバン・メイトの役割と講座運営の実際 ・各地のサポーター講座の様子	15 分
・サポーター養成講座の企画・運営ポイント ・グループワーク② ・講座の展開に協力してもらえそうなグループや機関はどこだろう・・・講座の開催先を考える	150 分
・グループワーク③ ・受講者に合わせたカリキュラムをつくってみよう	
Ⅳ．事務連絡 登録、アンケート回収、オレンジリング、修了証授与	15 分

出典：NPO 法人地域ケア政策ネットワーク編キャラバン・メイト養成テキストｐ9-10

表3 受講者の資格内訳（n＝93、アンケート回収率 93%）

認知症介護指導者養成研修修了者	2（1.8%）
認知症介護実践リーダー研修（認知症介護実務者研修専門課程）修了者	4（3.6%）
介護相談員	3（2.7%）
認知症の人を対象とする家族の会	1（0.9%）
行政職員（保健師、一般職員等）	8（7.3%）
地域包括支援センター職員	11（10.0%）
介護従事者（ケアマネジャー、施設職員、在宅介護支援センター職員等）	29（26.4%）
医療従事者（医師、看護師等）	16（14.5%）
民生児童委員	4（3.6%）
その他	13（11.8%）
不明	2（1.8%）

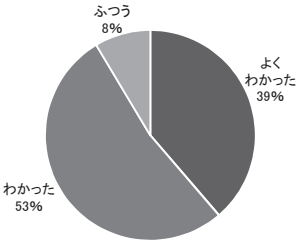

図 1 認知症サポーターキャラバンの概要、しくみは把握できましたか n＝93

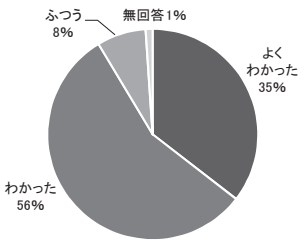

図 2 認知症サポーターの役割、活動内容がよくわかりましたか　n＝93

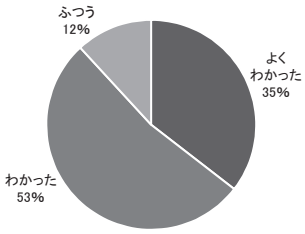

図 3 認知症サポーターの役割、サポーターは何をすればよいかわかりましたか　n＝93

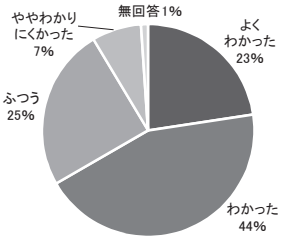

図 4 サポーター養成講座で、どのように認知症について教えればよいかわかりましたか　n＝93

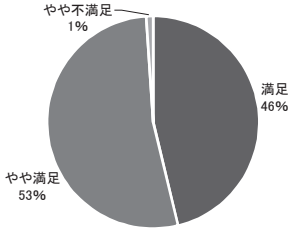

図 5 今日のメイト養成研修の内容全般についてご満足いただけましたか　n＝93

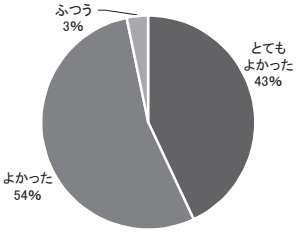

図 6 今回の研修は受講して良かったと思いますか　n＝93

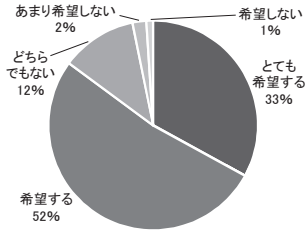

図 7 今後この大学でこの養成研修の持続研修を受けたいですか　n＝93

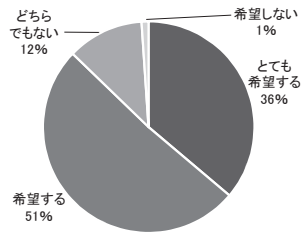

図 8 今後大学で認知症に関する公開講座を希望しますか　n＝93

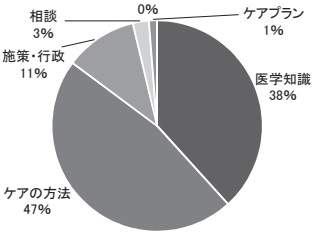

図 9 今後大学の公開講座として希望する内容 n＝93

分かれて担当者からキャラバン・メイト登録と今後の活動の説明を受け、キャラバン・メイト 100 名が誕生して解散となった。大変忙しい１日だった。まだまだ講座の運営には改善の余地があるものの、皆で取り組んだ充実感があった。

３.終了後のアンケート結果

研修終了後に回収したアンケートを集計した結果は次の通りだった（**表３、図１～９**）。

参加者で最も多かった資格は介護従事者（ケアマネジャー、施設職員、在宅介護支援センター職員等）で 26.4% だった。次に、医療従事者（14.5%）、地域包括支援センター職員(10.0％)の順となっていた。キャラバン・メイト養成研修の内容では認知症サポーターの役割や活動内容、行うことについてはどの項目も９割が「わかった」と回答していた。しかし、「認知症をどう教えるか」については約７割が「よくわかった」「わかった」と答えていた反面、「ややわかりにくかった」が７％いるなど、格差が見られ、どうすれば全員が理解しやすくなるか工夫が必要である。ただ、研修に対しては「満足」あるいは「良かった」、がともに９割以上となっており、研修自体は満足度が高いものであった。また、今後もこのような研修を大学で行うことにしても約９割が継続を希望していた。継続した場合に希望する内容としては「医学知識」「認知症ケアの方法」「認知症に関する施策や行政」「相談」「ケアプラン」があげられていた。これらの結果から、改めて教育研究機関としての大学の使命を実感し、今後地域の要望に応えて行きたいと考えている。

Ⅳ．今後に向けての課題

講座修了後すぐに市内のクリニック看護師が院内で講座を開いたという報告を聞いた。また、本学部では 2016 年３月５日に市民講座として高校生や若い人を主な対象とする認知症サポーター養成講座を実施予定である。三島市は学校が多い所で、たくさんの学生が通学していることから、この講座では若者層を中心に計画している。若い人に少しでも認知症の高齢者を理解してもらい、支援者となってくれることを期待して市民講座担当の先生方のご助言とご協力を受けながら準備を進めている。キャラバン・メイト養成研修は小さな試みだが、近隣で様々な認知症サポーターの輪が大きく広がり育ってくれることを期待している。また、今後の課題として受講者により理解しやすい工夫や追加教材を開発したい。

謝　辞

キャラバンメイト養成研修開催にあたり、多大なご協力およびご助言をいただきました広小路クリニック木野　紀先生、三島市長寿介護課　大石保健師、キャラバンメイトの湯山藤枝さん、細谷孝一さんに心から感謝し、御礼申し上げます。

引用文献

１）認知症高齢者の現状（平成 22 年）. 厚生労働省 .
２）厚生労働省 . 認知症サポーターキャラバン .（オンライン）
３）全国キャラバンメイト連絡協議会 . 認知症サポーター養成講座基準 .
４）厚生労働省 . 認知症サポーター等養成事業の実施について.出版地不明:老健局計画課長,平成21年.
５）三島市 . 第７次三島市高齢者保健福祉計画・第６期三島市介護保険事業計画（平成 27 年度～平成 29 年度）. 平成 27 年 .